

国立スポーツ科学センター（JISS） オプトアウトにより実施する研究

研究課題名	アスリートの特性からみた外傷・障害のリスク要因の探索
倫理審査委員会承認番号	2023-016-2
研究開始日	2025年5月8日
研究終了日	2026年3月31日
研究目的	女性アスリートにおける性ホルモンの変動と障害の関連や、ホルモン製剤投与による筋骨格系への影響を明らかにすること。
研究対象者	JISS婦人科外来を受診した選手のうち月経周期が正常な選手・JISS婦人科外来を受診した選手のうち、月経随伴症状に対する治療や月経周期調節目的でLEPまたはプロゲスチン製剤服用開始の方針となった選手・JISS婦人科外来を受診した選手のうち、月経周期が正常かつ超音波検査にて子宮および付属器に器質的疾患を認めない選手
研究概要	女性アスリートにおける性ホルモンの変動と障害の関連や、ホルモン製剤投与による筋骨格系への影響について研究を行い、コンディショニングおよび競技力向上に寄与することを目的に行います。研究は下記a～cの内容で行います。a. リラキシンと膝前十字靭帯損傷に関する検討 卵巣の黄体から分泌されるリラキシン値が高値の女性アスリートでは膝前十字靭帯損傷のリスクが4倍以上高いことが報告されていますが、リラキシン値と膝前十字靭帯損傷との関連について前方視的に検討した報告は少ない現状にあります。また、近年月経随伴症状の治療目的で使用される機会が増えているプロゲスチン製剤を服用後のリラキシン値の変化については明らかになっていません。本研究は、リラキシン値と膝十字靭帯損傷との関連について検討を行います。b. ホルモン製剤服用による骨密度への影響に関する検討 月経随伴症状に対する治療や月経周期調節目的でホルモン製剤（low-dose estrogen progestin (LEP) 配合薬やプロゲスチン製剤）を使用し月経対策を行うアスリートは増えつつあります。非アスリートを対象にこれらのホルモン製剤服用後の骨密度の変化を調べた報告はありますが、アスリートを対象として報告は少なく、今回治療目的でホルモン製剤を服用するアスリートを対象に、薬物療法開始後の骨密度の変化について検討を行います。c. 性ホルモンの変動に伴う腰痛・骨盤痛との関連についての検討 子宮や卵巣に異常がみられないアスリートにおいても、月経前の黄体期に腰痛や骨盤痛、腰部周辺の筋硬度的変化を訴えるアスリートがみられますが、この機序については明らかになっていません。今回の調査では、骨盤や腰椎の画像検査や炎症マーカー等を測定し症状との関連について検討を行います。
研究に用いる情報の種類	年齢、性別、競技種目名、外傷・障害既往、既往歴、血液データ、MRI、骨密度
研究の資金源	慶應義塾大学医学部スポーツ医学総合センターが受託している一般社団法人大学スポーツ協会からの研究費
研究に係る利益相反及び個人の収益	本研究に係る利益相反や個人の収益はありません。
研究責任者	能瀬さやか/スポーツ医学研究部門
共同研究者	（スポーツ医学研究部門）半谷 美夏、大西 貴弘、笠原 順、岡納 龍之介、米川 佳寿美、熊井 康こ（慶應義塾大学医学部研究部門スポーツクリニック）佐藤 和毅、勝俣良紀 木村 豪志、木之田 章
問合せ先	能瀬さやか・スポーツ医学研究部門・sayaka.nose@jpnssport.go.jp